

岡崎杯

赤谷慶子

岡崎大使ご存命の頃、年に二回程度岡崎杯なるゴルフコンペに参加せり。そは故椎名素夫氏女婿企畫するコンペなり。岡崎大使とラウンドする機會頻繁にあり。大使は氣功により力抜けば飛距離出づるなりと信じ、時折ティーショット打つ際、ボールと一緒に飛ぶ行爲に及ぶ。すなはちボールを打つ瞬間、ボールの方向に身體を浮かせ、そのまま倒れたり。キャディかくとはつゆ知らず、老人具合悪しく倒れたるかと思ひ、駆け寄り介抱す。吾、氣の毒に思ひ、キャディに説明をするも、迷惑さうなる表情となれり。

我がスコアは大體百十周邊にて、ライオンと言はる。百獸の王ゆゑさは稱ふるなり。さる著名なる財務官僚は彼のスコアをライオンと猛獸なりと説明す。ライオンはそもそも猛獸にて、何の事かと思ひきや、百十にもう十を足すと百二十となる。

さて話を振り出しに戻さむ。一度岡崎大使とラウンドせし際、吾百を切るスコアを出しき。フロントナインに五十を切り、四十九となりき。午後のバックナインは集中せむとスコアを數ふるを控ふ。最終ホールに Par 4 のホールにおきて三打にてグリーンを捉ふ。ボギーにて上がるが良しと思へどパットは一打にて上がりき。すと岡崎大使、「おめでたとう。つひに百を切りたまへり」と握手を求めてくれき。吾はスコアを數へざりしかば驚けど、大使は吾にプレッシャーをかけじと黙してありき。氣功教室において戲れたる大使を見慣れたれば、極めて配慮のある紳士なるなりと改めて感心せし記憶あり。

吾、最近は煩腦の數に近きスコアばかりにて、來春より少々練習を重ね精進せむかと思ひ立つ。

(平成二十八年十二月二十日受附)